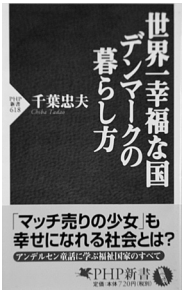
西南学院大学　人間科学論集　第５巻　第２号　161 ― 183 頁　2010 年２月

書　評



（Ｂ６判　206頁
720円（税別））

千葉忠夫 著
（ＰＨＰ研究所　2009 年９月刊）

『世界一幸福な国デンマークの暮らし方』（PHP 新書）

賀　戸　一　郎

I

＜千葉忠夫氏の略歴とデンマークの社会福祉との出会い＞

本書の著者、千葉忠夫氏は、1941 年東京生まれ、岩手県立一関第一高等学校卒業後、自衛隊幹部候補生学校入校（第 14 期操縦学生）。同隊に所属しながら東北学院大学２部英文科に入学し、1966 年卒業。1967 年自衛隊を退職し、社会福祉国家の実態の勉強を志して渡欧。デンマークでは、農家で働くなどしてデンマーク語を修得し、1972 年オーデンセ大学に入学。1974 年ソーシャルワーカーの資格取得後、社会福祉活動を始め、日本からの社会福祉研修生を受け入れる。

1983 年不登校生徒の施設・ボーゲンセ生活学園を設立。1997 年には日欧文化交流学院がデンマーク政府に認可される。1970 年代に生涯の師・バンクミケルセン（ノーマリゼーション実践提唱者で「ノーマリゼーションの父」とも言われるかたである。ちなみに、ベンクト・ニィレエは、ノーマリゼーションの原理の「育ての父」と言われています）と出会う。バンクミケルセンの偉業を後世に伝えるため、1991 年Ｎ・Ｅ・バンクミケルセン記念財団を設立。1997 年には日欧文化交流学院を設立し、日欧交流のためのさまざまな活動を行う。

現在、デンマークのボーゲンセ市在住。日欧文化交流学院院長。Ｎ・Ｅ・バ

ンクミケルセン記念財団理事長。2008年「社会福祉における国際協力の推進」の功績により外務大臣表彰。著書に『高校生たちの見たデンマーク』（表現技術開発センター）、『せいかつ大国、こんにちは　けいざい大国、さようなら』（ビネバル出版）、その他に、翻訳及び監訳本等もある。デンマークの保健・医療・福祉・教育・エネルギー・生活等に関係した専門職や行政関係者の講演やセミナーの通訳者兼解説者、並びに講演者として、デンマークや日本において、著しい活躍をされている。このような活動をより促進・活発・活性化することを主たる目的にして、2008年の12月には、日本の内閣府からNPO法人：「日本とデンマークの生活研究所」が認証されている。上述の諸活動の日本とデンマークでの企画と参加の受け入れの相談窓口、諸活動の日程や参加人数等の調整的な民間機関としての役割が期待されている。

本書の「おわりに」の冒頭で、著者・千葉忠夫氏が40数年前にデンマークに来たいきさつを述べている、彼が手にした最初のパスポートの査証の1ページに、1967年4月14日横浜港からデンマークに出国することを認める刻印が押されている、と述懐している。航空自衛隊に勤務しながら某大学の二部（夜間部）の英語科を卒業していた東北地方出身の26歳の千葉忠夫青年は、地球上に人間の住みやすい国があると聞き、自分の目で見てやろうと、当時一番安くヨーロッパに行けるコースはソ連経由であったので、横浜港の第三桟橋から旧ソ連船・バイカル号に、片道切符と当時持ち出せる限度の外貨を5,000ドルと小遣い代わりに母から手渡された紙切れ（そこには、外国を巡りて知識得るという　吾が子よ体を先ずいとうべし　無事を祈る父母の心は汝胸に　何時も住めるを常に忘れるな　という母の詠んだ手向けの言葉が記されてあったという）を懐に、背には登山用のリュックを背負って乗り込みヨーロッパを目指した。筆者が最初に着いたのがフィンランドの首都・ヘルシンキでしたが、そこでは仕事を見つけることができずにフェリーに乗り、スウエーデンのストックホルムを目指し、そこでもまず仕事と寝るところを探したが見つからなかった。このような状況のなかで、筆者は、ハンス・クリスチャン・アンデルセンが

「デンマークに来なさい（H．C．アンデルセンが「幸せな国においでよ」と言っているように思えた）と呼んでいるような気がして、ストックホルム滞在を3日間で切り上げ、夜行列車でコペンハーゲンを目指し、1967年4月29日の朝、首都コペンハーゲンに到着した。車窓から初めて見るデンマークは、緑の麦畑、点在する赤レンガの家、庭に咲く色とりどりのチューリップなどすべてが美しく、おとぎの国そのものでした。

しかし、あこがれの国にたどり着いたものの、当初は社会福祉そのものがどこにあるかもわからず、自分が生きるための食べ物と住むところを探すことで精一杯であったと、述懐している。

本著は著者が、デンマークに最初にたどり着いた40数年前を走馬灯のように振り返りながら、この間にさまざまな体験・実践をとおしてデンマークの社会福祉を学んできた現在、いち早く祖国・日本をより住みよい国・幸福な国にしたいという一貫した思い・願いを秘めて、いまだ志半ばであると自覚しながらも、これまでに知り得た基本的なこと、大切だと感じていることの到達点を、より多くの日本の老若男女に伝えたいという強い思いと願いを込めて書したものである。デンマーク人の心に150年以上宿り続けた世界的に著名な童話作家・ハンス・クリスチャン・アンデルセンのアンデルセン童話（絵本）164篇のなかから日本人にもよく知られ、親しまれている6篇の作品を手がかりに自由、責任、教育、福祉、貧困など日本社会が抱える諸問題・課題について、再考している。

Ⅱ

＜本書の構成＞

千葉忠夫氏は、デンマークを中心とした北欧で生まれ、育てられたノーマリゼーションの思想・実践に関する理論的研究者というよりは、社会福祉国家を確立したデンマークの基本的な思想や社会福祉国家を持続可能にしている基本的な仕組みや運用の仕方等に関して、祖国・日本並びに日本人（子どもからお年寄り）に向けての実践的社会福祉教育者であり、社会福祉啓発者であると評者は思う。日本とデンマークにおける広義の社会福祉（医療、介護、教育、労

働などを含む）の橋渡し的な役割を果たされているかたともいえる。

本書は、はじめに、本文（6つの章)、おわりに、で構成されている。6つの章と節のテーマは、以下の通りである。

第1章　マッチ売りの少女が幸せになるためには―貧困を考える

○　寒くてどうしょうもなかった／少女が望んだ幸せとは／働かざる者食うべからず／日本の貧困率は世界5位／問題解決には助けが必要／貧困をなくすには

第2章　はだかの王様のように驕されない―政治を考える

○　「はだかの王様」／腐敗が世界一少ない国／女性の社会進出で好循環が生まれる／デンマークで少子化が止まった理由／国家予算の約75％が教育や福祉に使われる／贈収賄ができない制度づくり／なぜ日本人は税金に嫌悪感を抱くのか／社会的弱者はだまされ続けている／地方分権で政治、福祉が変わる／デンマークの投票率は約90％

第3章　みにくいアヒルの子をいじめたのはなぜ？―教育を考える

○　「みにくいアヒルの子／人は見た目で判断する／自分の生き方は自分で決める／デンマークの国民学校法とは／国に必要な人を育てる／義務教育期間に学ぶべきこと／教科書の指定がない授業／「義務教育」と「教育の義務」の違い／登校拒否には理由がある／好きなことを勉強させる／高校の授業がわかる人は3割程度／高校への進学率は約45％／在学中にしっかり実習経験を積む／大学全入は大きなムダ／役割ポストは公募制／デンマークには勤務評定がない／教師と生徒が寝食を共にする

第4章　赤い靴は無責任の教え―社会のあるべき姿を考える

○　「赤い靴」／ルール違反のツケは大きい／幸せな国の方程式／自由の使い方をどう教えるか／ピザの公平なわけ方／自由の代償と連帯責任／職場を離れたら「目線」は同じ

第5章　ナイチンゲールの歌声は介護の心―福祉を考える

○　「ナイチンゲール」／思いやりのある介護とは／機械のできること、人にできること／福祉国家の医療制度／国民全員にケースワーカーが

つく／住み慣れた家にできる限り住みたい／キーワードは「自律のための支援」／ヘルパーが10分以内に駆けつける／成人以降の親子関係／ノーマリゼーションの始まり／大規模収容施設をなくせ／障がいゆえに不可能なことがある／在宅生活にも一長一短／障がい者福祉は社会が担う／「親亡き後」の心配は不要／障がい者が一番求める支援

第6章　人魚姫の選択―自律することを考える

○　「人魚姫」／自己決定は利己主義となりうる／自律と自立／生活を守るための労働組合／仕事が続けられない社会的障がい者／可能な限り社会復帰を促す／男性の育児休暇取得率は高い／第三の人生で社会に貢献する／奉仕活動ができるようになるには／デンマークの社会問題／社会的弱者が困らない社会をつくる

Ⅲ

＜本の内容の紹介と評者のコメント＞

ここでは原則的には本文の6つの章のなかから、社会福祉国家デンマークを築き、今では世界一幸福な国だと大多数の国民が感じている基本的な要因と思われる内容について述べている第1，2，3の3つの章に限定して、内容を紹介しながら、評者としてのコメントをする。

ただし、複数の章及び節で述べられている内容に関しては、いずれかの章及び節を中心に横断的に内容をまとめ、評者のコメントもそれに沿っておこなう。また、著者が日本国及び日本の人びとに問いかけたり、課題提起している内容に関しては、Ⅳでまとめて述べることにする。

第1章では、約160年前にH．C．アンデルセンが書き上げた「マッチ売りの少女」の話を導入しながら、国民・市民が幸せになるための基本的課題としての貧困の考え方と対処方法について述べている。

マッチ売りの少女は働いても働いても収入が追いつかず、いつも夢見ていた幸せな生活は得られず、とうとう天国で叶えてもらうことになってしまいました。マッチ売りの少女が望んだ幸せとは、温かなストーブやおいしい料理がある家庭、そしてやさしいおばあちゃんの微笑みでした。彼女は残念ながら死に

よって幸せを得ましたが、死ななくては幸せになれないというのではあんまりです。物質的には、いまのわが国の子どもたちは恵まれている。それ故に、究極な状態は想像しにくいかもしれません。それでも、究極な状況に陥ったとき、自分は何を望むのか真剣に考えることから始めなくてはいけないのです。

究極の状況に陥ったとき、人間が生きるためには、食べ物が必要です。人は「パンのために働く」のです。働かなければ食料を得られなかったので、「働かざる者は食うべからず」といわれることもありました。ここでいう「働かざる者」とは、働ける能力や環境があるにもかかわらず、働かない怠け者のことです。年少の子ども、身体的、精神的にしょうがいがあって、働きたくても働けない境遇の人たちや失業中の人たちを指すのではありません。このような境遇の人たちには、労働よりも先に、安心して食の糧となる収入の保障を社会全体で考えることが必要となります。

一方、いわゆる怠け者に対しては、決して過保護にすることなく、労働の必要性を説かなければなりません。働くことによって得る対価、そして納める税金で社会は循環しています。デンマークでは、一般的には 18 歳で親からの自立・自律が求められています。これとは逆に労働人口が毎年減少している日本（わが国）では、いつまでも親の庇護のもとで生活をし、自立・自律を遅らせたり、働くことを放棄して、その日暮らしを何年も続けている人たちが増えてきています。彼らは親がいなくなったり、自分が年老いたときにはどうやって生活する術を見つけるのでしょうか。自らが稼ぐ術をしらないと、食べることすら難しくなり、それこそ貧困という究極の状況に陥ります。わが国の若者たちが、働く大切さ、自分で生きるということを、早く生活のなかで実感しなければならないと思う。

ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）に加盟している国々の所得分配と貧困の現状に関する比較調査の報告書（2005 年）によると、貧困率が最も高い国は、メキシコ 20.3%、次いでアメリカ、トルコ、アイスランドと続き、わが国は 15.3 %で第 5 位です（ＯＥＣＤはその国の全国民の平均所得の 50 %以下の所得しかない家計を貧困者と見なしている。この定義に従うと 15.3 %と計測された）。先進諸国だけに注目すれば、第 3 位の高貧困率の国です。わが国は、「経済大

国」であるにもかかわらず、「高貧困率国」であるという事実をしっかりと認識する必要がある。国民の個人所得の格差の大きい国ともいえる。昨今貧困率が高まってきているという事実は、日本の生活保護制度の対象者の数でも確認できる。一方「経済大国」ではないデンマークはＯＥＣＤ内で「一番貧困率の低い国」であり、国民の個人収入の格差も一番小さい国である。ヨーロッパ全体の貧困率が７人に１人であるのに対し、デンマークでは17人に１人となっている。デンマークの最も貧困な人たちの収入は、他の諸国の人たちの収入よりもはるかに多いといわれ、個人収入の平均化された（個人収入の格差が少ない）国であるといえよう。

以上の比較から明白になった国民一人ひとりの収入と貧困率からわが国にいま問われている問題・課題の解決のためにデンマークから学び、考え、行動すべきことは何か。

換言すると、国民一人ひとりが住みやすい国になる第一の条件は何かということである。

「寒くて、お腹が減ってどうしようもないけれど、今日の稼ぎが足りないから帰るにも帰れない、残っているマッチをどうしよう・・・」というマッチ売りの少女の心境は、当時の貧困を如実に表しています。マッチ売りの少女は、自分で貧困を解決することはできなかったし、誰も助けてくれなかったのです。貧困には助けが必要です。マッチ売りの少女のラストシーンは少女が亡くなった場面ではありません。翌日、街の人が少女の亡くなった姿を見て、次のように思った場面です。「ああ、寒くて凍え死んだ子がいるな」。

鳩山由紀夫内閣総理大臣の最初の所信表明演説で公式に国民に発せられた鳩山政権の基本的政治目標を象徴したキーワードである「友愛」とは、死ななくては幸せになれないというところまで至らせないようにしなくてはならないということです。この実現が「友愛社会」であり、わが国の国民一人ひとりにとって住みやすい国づくりであり、幸福な国づくりであると思う。

この話の教訓は、彼女は幸せを望んだけれども、誰も助けてくれなかったから結局は死んでしまったということであり、「彼女は死んだけれど、それで幸せになった・・・」という受け止め方では駄目だということです。どんなに貧

しくても、マッチ１本あれば幸せだという話ではないのです。

私たちは、いま、本当に困っている人を助けるためにはどうしたらよいのかを、真剣に考えなくてはならない。

わが国では11年間連続して、３万人以上の人びとが自殺している。そのなかには、貧困が原因で自殺する人も含まれている。また、会社が破綻して生活に困って自殺する人もいる。明日の糧を思い悩んで自殺をしてしまう人がいる。このような自殺者が数多くいる社会が、住みやすい国であるはずがない。デンマークにも自殺する人はいる。しかし、貧困による自殺者はほとんどいない。なぜならば、デンマークは社会福祉サービス（社会的サービス）で何人も飢え死にさせないというのが、国の施策の一つのキーワードだからです、と筆者は述べている。

筆者は、貧困率世界第５位の祖国（母国）・日本を救うためには、国民が連帯して貧困者を救う姿勢を持つことが必須条件であり、社会的弱者と呼ばれる人に対する生活保障が充実しない限り、貧困はなくなりません、と断言している。社会保障には、莫大なお金を必要とします。“国民が連帯して”ということは、当然社会保障に必要なお金を国民が出さなければならないということを意味します。国民一人ひとりが、自分たちがお金を出し渋って、国を責め立てるだけ、というのは少々身勝手のように思うと、筆者は述べている。

しかし、日本政府が国民の本当に望んでいる社会福祉制度・政策とはほど遠い社会福祉行政をしていること、まだまだ税金のムダ遣いが是正されていないということ、国民が政治不信に陥っていること等々が原因となって、日本国民が税金を納めることに対する無責任さを生み出しているとも、筆者は指摘している。このような状況のなかで、日本政府が貧困をなくすために行なうべき基本的課題として、現段階で少なくとも20〜30年先の人口推移を算出し、生活保護費、障がい者年金、高齢者医療・介護費などに必要な予算総額を算出し、それを公にしたほうがよい。この算出した必要な財源を確保するには、どうしたらよいのかを考えるのが社会福祉政策（論）である。わが国は貧困率世界第５位といっても、依然としてアメリカに次ぐ（最近では中国が第２位になったともいわれている）経済大国なのですから、社会的弱者に対する妥当な経済支

援によって、その汚名は返上できる。あわせて、生活保護費、障がい年金、高齢者年金を支給する場合でも、それぞれの受給者が身体的、精神的に労働可能であれば、何らかの公的な職場、例えば社会福祉施設、学校、病院などで作業をしてもらうような政策を立てる必要があるとも、筆者は提言している。

またわが国から貧困をなくすには、国民一人ひとりの連帯が必要だ。その連帯とは、信用できる政府に、しかるべき税金をきちんと納めるということであるとも、重ね重ね強調している。

約 170 年前のデンマークの貧困者の状況を教えてくれる「マッチ売りの少女」のように、貧困で命を落とすようなことを起こさないためにも、評者自身を含めた国民一人ひとりがこの問題・課題に積極的に取り組む必要があると、第 1 章の内容を結論付けている。

第 2 章では、筆者は『はだかの王様』の話を引き合いに出して、社会福祉国家形成と政治との密接な関係について述べている。デンマークの政治運営は非常に透明であり、何が行われているのか、政治のなかが見えるように、国民は常に留意してきた結果、今日では政治における腐敗が世界で一番少ない国である。そして、その根底には「社会福祉国家」としての歩みがあると、述べている。具体的には、1960 年代に築き上げた社会福祉国家までの道のりをたどって、その概要を次のように述べている。

12 世紀、バイキング時代を終えたデンマーク人は、国民すべてが農民といってもおかしくない国であった。農民は、各地に点在する大地主である庄屋の下で、小作人として働いていた。当時は「囲い込み法」に拘束され、自分が働いている庄屋から自由に移行することが禁じられていた。しかし、1788 年、自由を求めた農民たちは領主との話し合いにより、「囲い込み法」を無効にさせた。奇しくも翌 1789 年には、「自由、平等、博愛」を謳ったフランス革命が起こった。1814 年にデンマークは、世界で初めて「教育の義務制度」を決めた。さらに、最初の国民高等学校が、1844 年に設立され、教育の基盤をつくり上げた。

1848 年には絶対王政を廃止し、翌年に自由主義憲法を制定した。1864 年、ドイツ・オーストリア連合軍に領土争いで破れたが、デンマークは失われたも

のを国内で取り返す国づくりに励んだ。筆者は、この歩みの延長線上で社会福祉の原型が生まれたのは、1866年、英国と並んで世界で最初の“農業協同組合”を設立したことにあると、述べている。1900年代に入り、近代工業化に伴い、農民は都市労働者として農村から移住し、農業協同組合の経験を持つ彼らは、新しい職場に労働組合を発足させていった。労働組合は自分たちの生活を守るための連帯であり、決して過激な政治闘争は目指さなかった。

そして、1929年、世界大恐慌が起こった。デンマークも例に漏れず、不況で失業者が増え、大変な時代を迎えた。その時、政治家たちはこんな苦しみを二度と国民に味あわせたくないと、社会福祉法の充実に取り組み始めた。1940年台に入ると、デンマークはナチス、ヒトラーの軍隊に国土を占領されてしまった。ドイツ軍が越境してからわずか数時間しかデンマーク軍は抵抗せず、軍隊は速やかに解散、後には警察まで解散してしまいました。“自由”を自分たちの手で勝ち取ってきたデンマーク人、自由を一番尊ぶデンマーク人にとって異民族に統轄されることは苦渋でした。しかし、デンマークの軍隊は占領軍とほとんど交戦せずに解散したことで、「国敗れて山河あり」とはならず、日本の第二次世界大戦後のように食糧事情はあまり窮しなかった。戦後は復興のため、たくさんの労働力を必要とし、女性の社会進出・参加が進み、1960年代にはデンマークは国民のすべての生活を保障する初期の「社会福祉国家」を築き上げた。

筆者は、デンマークはよく「社会主義国」と間違えられるが、「社会福祉国家」であり、「資本主義」の国であることを強調して述べている。換言すると、デンマークは経済と福祉のバランスがうまく取れている国だということもできる。筆者は、私たちがデンマークを訪ねて行ったときでも、日本に来られたときの講演や通訳の補足説明でも一貫してこの二本の柱が、社会福祉国家・デンマークを支え、持続させている基本体制であるということを主張している。

筆者は、デンマーク経済が安定しているのは、なんといっても女性の就業率の高さ（約80％の女性が働いている）によって生まれる好循環と自給率の高さであると述べている。具体的には、男性と同じぐらい税金を払うことになり、女性の就業率が低い国と比較すると、国家収入が倍近く増えることになる。ま

た、女性が社会進出すると、家庭で子どもや障がいのある人、高齢者の世話をする人がいなくなるので、保育園、幼稚園、障がい者施設、高齢者施設を整備しなくてはならなくなる。そして、それらの施設などで働くのは女性が主体であるから、女性議員の数が増えてくるという好循環が生まれる。

さらに、女性の社会進出に伴って、女性議員の数が増えていく。具体的には、地方議員の 30 %、国会議員は約 40 %が女性である。2009 年 6 月 7 日に行われたヨーロッパ議会議員選挙で、デンマークが持つ 13 議席争われた結果は、女性議員が 6 人選ばれたということです。

女性議員が増えると、女性が働くための環境が整えられる。出産休暇、育児休暇の制度がしっかりとしていくうえ、保育園への入園を待機しているような子どももいなくなる。女性の社会進出は経済の安定をもたらすとともに、社会福祉の発展につながる。

デンマークの農業は自給率が 300%である。食べ物があるというのは、非常に安心で、経済も安定する。

デンマークで少子化が止まった理由に関して筆者は、次のように述べている。

わが国に比してデンマークには高齢者よりも子どもが多いのは、母親を支援する制度がたくさんある。たとえば筆者の長男が生まれたとき、妻が退院してきて 3 日と立たないうちにケースワーカー（ソーシャルワーカー）が、「私はこの町の保健師です。あなたのところに子ども生まれましたね」と訪ねてきてくれた。そして「お子さんの育児について、いつでもお手伝いしますから」とわざわざ伝えに来てくれたのです。子どもが生まれてすぐに保健師が対応できるのは、病院（医療）と地域がしっかり連携しているからである。保健師は、子育ての相談、たとえば日本でいう「公園デビュー」の方法まで教えてくれる。生まれた子どもに障がいがあった場合は、治療方法や今後について教えてくれる。デンマークのほとんどの家庭は核家族です。核家族だと初めて子どもを授かったとき、特に障がい児の場合はいろいろなことに悩みます。でも、保健師が国民全員についているケースワーカー（ソーシャルワーカー）に連絡を取ってくれているので、お母さんはとても心強い。

デンマークの子育て支援が確立されたのは、1980 年代です。デンマークで

も女性が社会進出した1980年代には、出生率が1.4ぐらいまで下がってしまった。そこで、女性議員が「子どもを生んでも仕事ができるように」と、産前産後休業（産休）や育児休業（育休）などをしっかりと制度化し、地方自治体は、「しっかりと子どもの面倒をみる場所がありますよ」と保育園、幼稚園を整備していった。また、子どもが生まれたら、児童手当が支給される。18歳までは各市町村から四半期に一回児童手当がもらえる。障がいのある子どもが生まれた場合、施設に入所させないで自分で育てようとするならば、親はいまの仕事を続けられなくなる。そこで、デンマークではいまの給料の約80％を保障し、子どもの面倒をみられるようにする制度もある。このように制度をしっかりさせるうちに、少子化が止まった。現在の出生率は、1.9ぐらいである。

国家予算の使われ方については、次のように簡略にまとめて述べている。

国家予算の約75％が教育や福祉に使われている。具体的には、次のような生活保障の為に使われている。

・全国民には年金が支払われ、障がい者には早期年金といった、生活保障費が支払われる。

・デンマークの高齢者は、その多くは年金をもらいながら、自分の持ち家か住宅公団の1ＬＤＫあるいは2ＤＫの賃貸高齢者住宅に住んでいる。住宅費や食費、光熱費などその月にかかるものをすべて払ったとしても、手もとに2～3万円（日本円に換算して）残る。

・生まれたときから亡くなるまでの医療費、教育費も無料である。

このように、障がい者や高齢者をしっかりと保障したり、医療費・教育費を無料にするためには、ものすごくたくさんのお金がかかる。

デンマークの国家財源の主となるものは国民が納める税金である。税金は大別すると直接税と消費税があり、国民は収入の約50％を直接税として納めている。働く女性が多いことがデンマークの直接税収入を押し上げ、国家財政を潤している。そして消費税は25％で、世界一の高税率である。

デンマークでは国民が納めた税金の用途が、毎年国税局から公表される。デンマークは税率が世界一高い代わりに世界一高水準の社会福祉サービスを提供、国民も税金に対して世界一強い関心を持っているといえる。

国民が納めた税金は何に使われるのかというと、国家予算の約 75 %は教育、文化、医療保険、福祉などに使われている。地方自治体の予算配分は約 60 %が福祉予算であり、福祉予算の約 60 %が高齢者福祉に使われている。そのため、“ゆりかごから墓場まで”、国民すべての生活が保障されている。ここで留意すべきことは、収入（富）の再分配といっても、それをメインにしてきた旧ソ連、東欧は崩壊してしまった。それらの国との違いは、デンマークは社会福祉国家であるけれども、社会主義国ではないということである。デンマークは資本主義国であり、完全に西欧圏である。ＮＡＴＯに加盟しており、イラク、アフガニスタンにも軍隊を派遣している。イラクやアフガニスタンを支援するためにデンマークの青年が年間約 30 人の命を失っている。

デンマークの政治体制とその特徴について、著者は簡単に以下のように述べている。

もちろん、デンマーク国内の政党には左から右まであるが、ユーロコミュニズムに近い政党も勢力を誇っている。ユーロコミュニズムは、旧ソ連や中国のような共産主義ではない。旧ソ連共産党の路線に追随しない、自主的な共産主義路線である。資本主義のなかに連帯や共生を打ち出し、みんなが社会のなかでうまく生活していくことを目指している。

旧ソ連や東欧では、政治家の贈収賄などの腐敗が横行していた。デンマークでも政治家の贈収賄がないわけではない。でも、世界で一番少ない国でもある。

では、なぜ贈収賄が少ない、クリーンな国であるのか。それは、他人をだまさないということにつながる。他人をだまさないというのも、やはり教育のなせるワザではないかと筆者は指摘している。

第 2 章では、デンマークの教育の理念と仕組みと内容の特徴について、次のように述べている。

デンマークでは、日本の中間・期末試験というものがない。あるのは 9 年生（日本の中学 3 年生）を卒業する時点で初めて国家の統一試験である。生徒がどれだけ勉強したか試験され、点数がつく。しかし、判定方法は日本とは大きく異なる。試験が終わると、答案用紙を集めて大きな封筒に入れて、違う学校におくる。答案は別の学校の先生が採点する。同じ学校の先生が採点すると、

どうしても解答を見る目が変わる。しかし、他校の教師が採点するので、たとえば、国語の文章題に対する記述解答の場合、「言葉は足りないけれど、この子は最近頑張っているから正解でもいいかな」ということはあり得ない。もちろん、「この子の親からはお歳暮をもらった」などということは絶対にあり得ない。

9年生、高等学校あるいはその他の上級学校で行われる口頭試問で試験室の控え室に幾つか問題が置いてあり、抽選券のように問題を引く。30分程度、その問題について考えた後面接室に入るが、面接官は違う学校の教師である。

このように採点は生徒とかかわっている教師がしないというルール、八百長できないルールがある。

筆者は、もしかしたらデンマークでは、人間は弱いから悪いことをやってしまいがちであるということを知っていたからこそ、それができない制度をつくり出したのかもしれませんと、述べている。

さらに筆者は、子どもの頃からしっかりとした社会基準が存在していると、悪さができない。すると正々堂々と勝負をしなければならず、自ずとクリーンさを身につけるのではないかとも、述べている。

デンマークは世界一の社会福祉国家で、幸福度も世界一といわれている。そして、税金が高いのも世界一である。国は国民が納めた税金を、国民が納得するように再分配している。

デンマークは他国から「高福祉高負担」だといわれているが、デンマーク人は「負担」とは思っていない。なぜなら、いろいろな形で国民全員に還元されているからである。「自分は病気にならない」「老人にならない」という人はいないでしょう。納めた税金が医療、教育、社会保障、介護などいろいろな形で国民へ還元されていますので、決して負担ではないのですと筆者は言い切っている。ですから正確には「高福祉高負担」ではなく、「高福祉高税」なのですと、筆者は説明している。ある世論調査によると、85％のデンマークの国民はいまの税率、いまの福祉サービスで満足しているという答えが出ているとも、筆者は述べている。

国の規模の違いは、その国の治めるやり方に大きな影響を与えると筆者は述

べている。規模が大きくなると、どうしても権力関係（中央集権・地方集権）に陥りやすくなる。住民に一番近いところで政治、福祉が行なわれれば、国民が住みよくなる。

日本の九州とほぼ同じ大きさの小さな国デンマークでさえも 2 年前、かって 14 あった県を 5 つの地方自治区とし、275 あった市町村に相当する末端は 98 の地方自治体に改革したということである。

デンマーク、スウェーデンはともに、成人は 18 歳以上です。18 歳にする利点は、より多くの人が選挙権をもつことにある。選挙権を 18 歳以上にもたせることによって、より多くの国民の意思が政治に反映されることになる。民主主義国家ではなるべく多くの人に参政してもらうために、選挙権、被選挙権を 18 歳からにすることも適切であると思うと、筆者は述べている。したがって、親の扶養の義務は 18 歳までとなる。ただし、18 歳で自立不可能な人のために、自分で生活していけるようにするための支援制度をしっかり整備しなければならない。

国や県、あるいは市町村が何もしてくれないという嘆きの声をよく耳にする。しかし、そうした考え方は誤りである。“主権在民”をしっかりと認識している国民は、自分たちの生活を保障してくれるしかるべき議員を、自分たちの代表として選ぶ。デンマークの政治家の生命は、国民の生活保障にあるといっても過言ではないと、筆者は述べている。デンマークの投票率は高く、国会議員の場合は約 90 %近く、地方議員や知事、市長の選挙においても 75 %を切ることはない。民主主義はその名の通り「民」が「主」である。自分たちがどのような生活を望むかを自分たちで決めていることが、この投票率に如実に表れている。

第 3 章では、H．C．アンデルセンの自伝ともいわれている「みにくいアヒルの子」の話を使い、「みにくいアヒルの子をいじめたのはなぜ」というテーマで、デンマークの教育の基本理念、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等教育の具体的な教育内容について述べている。

人は見た目で判断するというテーマで、いじめの根本的な原因について触れている。同じ類のものが連帯して異質なものを排除しようする働き、マイナス

思考の連帯感が「いじめ」となる。いじめをなくすにはマイナス思考の連帯感をもたせないように、子どもの頃からの教育をしっかりとする必要があると強調している。

子どもでも自分で自分の考え方や生き方を決めることが重要である。親は、子どもを自分の所有物にせず、子どもの自由、自己決定を尊重しなければならない。子どもがいきたいと思う道を歩ませられる親、子どもの気持ちを理解する親になりましょう。たんなる学歴社会のために無理な進学を強いることは愚の骨頂ですと、筆者はわれわれ日本の親や大人に強く呼びかけている。

日本の教育基本法に相当するデンマークの「国民学校法」で強調されていることは、学校と保護者とが連帯感をもつ、生徒個々の個性を尊重する、学習は実践に重きをおく、生徒の想像力・判断力をもたせて自信をつけさせる、社会性・民主主義を実践として教えることである。このことが、社会福祉国家を継続維持していく国民の教育である。障がい児教育も同一の国民教育法のもとで行なわれている。

本書の第3章の後半では、「国に必要な人を育てる」、「義務教育期間に学ぶべきこと」、「教科書の指定がない授業」、「『義務教育』と『教育の義務』の違い」、「登校拒否には理由がある」、「好きなことを勉強させる」、「高校の授業がわかる人は3割程度」、「高校への進学率は約45％」、「在学中にしっかり実習経験を積む」、「大学全入は大きなムダ」、「役職ポストは公募制」、「デンマークには勤務評定がない」、「教師と生徒が寝食を共にする」という諸テーマのもとで、デンマークの教育の特徴について具体的に述べている。紙幅の関係で詳細に触れることは割愛することにする。本著の残りの第4・5・6章の3つについては今回の書評としては章別に分けて具体的に触れないことにする。テーマのみを見ても、わが国の教育の基本的理念、教育の運営組織、教育方法の視点と重点の置き所が大きく異なっていることが、一目瞭然である。本書の第4章にも少し触れられているが、これらを見習って大胆なチェンジをしない限り、福祉国家や福祉社会を構築するために必要な自由、平等、友愛（博愛）連帯、協同、共生などが活かされた幸福な社会の実現は夢の夢でしかあり得ないことだと、評者は思う。

前半の 3 つの章の内容が好循環してこそ、残りの章の内容が世界一幸福な国づくり、社会づくりの実態につながっていると評者は強く感じさせられた。

Ⅳ

＜いま、わが国の国民、教育者、政治家、福祉関係者等がデンマークから学び、理解し、行動すべきこと＞

日本も 60 余年かけて、やっと本格的な政権与党が、自由民主党から民主党に変わった。「新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れる！」というたとえ話（格言）があるように、戦後 55 年体制から脱皮するためには、政治家のみではなく、国民一人ひとりの意識、価値観、仕組み等々をチェンジしなくてはならない。

著者も日本人なので、なぜ日本人が税金に対して嫌悪感を抱いているかよくわかると言う。その主たる理由として、税金は、その昔、一握りの武士階級の領主に年貢と称して取り立てられた農産物などの貢租と同じであり、何の見返りも得られなかったという農民の恨みが現代まで引き継がれているから、税金を払うことを負担に感じているからでしょうと述べている。

わが国の累積国債発行額が 800 兆円強（地方債などを加えると 1,000 兆円弱）であることは、政治家も国民も十分に知っている。そして、わが子や孫の代まで借金を残さないようにしたいとも願っている。そのために新政権の民主党は、国民の納める税金を高くする前にまずは行政官庁のムダ使いを見出し、そこに税金を全く使わないようにするか、減額するかを決めるために、これまでの国やその出先機関の業務の仕分けを行なっている最中である。しかし、ムダ使いの省庁・出先機関や天下り先等のチェックだけをどんなに厳格に行なっても、過去の借金を確実に減らしていくことは不可能なことであると評者は思っている。

著者は、日本国民は消費税を増税しなければいけないことを理解していても、デンマーク国民と異なり、政治家や行政を信用していないため、どうしても納得できないのですと述べている。

日本は戦争に負けて、経済的にも大きなダメージを受けた。経済復興に力を

注ぎ、その結果、経済大国になった。日本国民は、一生懸命頑張ってきたのですが、経済面だけに力を注ぎ過ぎたため、社会保障面を考慮する余裕がなかったので、社会的弱者のことを忘れていたというのが現状である（生活貧困国となってしまっている）。

だから、わが国全体では、まだ経済的に余裕（国民一人当たりの貯蓄率は世界一である）が残っている今こそ、見直すべきである。

デンマークが福祉に力を入れたのは世界大恐慌の時である。1930 年代、みんな苦しい思いをしたから、政治家も国民も、社会保障制度をしっかり築いて、二度と苦しまないようにしたのである。

わが国は「高福祉高税の国」にはなり得ないかもしれない。また、見えないもの（ゴール）を見えると言って、実現しそうもないことを求め過ぎると、はだかの王様のようにつけこまれてしまいがちである。まずは、このくらいなら・・・・というものを目指していくことが現実的である。わが国においてはデンマークなみの「高福祉高税」が無理であれば、「中福祉中税」を目標としてみるのがいいのではないでしょうか、またもし、あなたが国を信用できないのであれば、消費税を福祉のためだけに使う社会福祉事業所を国民自身で設立したらどうでしょうかとも、筆者はサジェッションしてくれている。

さらに著者は、誰もが納得できるシンプルで透明な組織において、消費税を徴収して使いよい道を決め、配分できるようにすればいいのです。貧困者、障がい者、高齢者といった社会的に弱者といわれる人たちが、安心して生活していける国になって欲しいとも述べている。

日本国憲法第 25 条に謳われていながら、わが国では社会的弱者、いわゆる貧困者、障がい者、高齢者の生活が健康で文化的な最低限度の生活になっていない。社会的弱者である国民の生活を保障するはずの政府の政策が不完全である。筆者いわく、日本国民はあまり気づいていないかもしれないが、国民は国にだまされ続けていると。

王様がいかさま師にだまされて「見えない衣装」を身にまとい、とうとうはだかで街を歩いてしまったという『はだかの王様』の物語は、私たちにいろいろなことを教えてくれる。世の中には人をだます人がたくさんいるが、だまさ

れる人もたくさんいる。どちらが悪いかといえば、当然、人をだますほうが悪いに決まっている。しかし、嘘と知っていながらだまされ続けるのであれば、だまされる人にも問題があるといわねばならない。

世の中のいろいろな事件の始まりは、だますことだまされることがほとんど同時に起こっている。いったん人をだまし始めると、その嘘を正当化しようとするため、新たな嘘をつかなくてはならなくなる。嘘は雪だるま式に大きくなり、その結果、大事件となってしまうことがある。

いかさま師はだますことを自分の仕事としている人たちなので、そのおろかな行為をやめさせることはむずかしい。一方、だまされる側は往々にして猜疑心を持たない正直者が犠牲になることが多いので、本質を見極め、だまされないようにするのが肝心である。国や地方自治体の政治を司る人が嘘を正当化して、国民をだまし続けるようなことがあっては絶対にいけない。

地方分権で政治、福祉が変わるので、日本も一日でも早く道州制にして、国、州、地方の役割を明確にし、地方自治体が住民に密着した福祉行政を、責任を持って果たしていくべきではないかと、筆者は提言している。

日本国民は政治家を信用していないばかりか、自らの主権を行使していない。それが投票率に表れている。筆者は、次のような問いかけをしている。あなたは、自身の生活を保障してくれる、しかるべき議員をしっかりと見定めていますか？そして、その人に投票をしていますか？と。

また、はだかの王様を増やさないためには、あなたが政治に参加する行動が第一歩となるのですと、筆者はわれわれ日本の国民に呼びかけている。

第４章の「赤い靴は無責任の教え―社会のあるべき姿を考える」のなかで、筆者は、幸せな国の方程式を次のように説明している。

「幸せ」とは、「生活しやすい」ことだと述べました。それでは、「幸せな国」とはどういう国でしょうか。筆者はここに、次のような幸せな国の方程式をつくっている。幸せな国とは、住みよい国のことです。住みよい国とは、生活大国のことです。生活大国とは、社会福祉国家であることです。つまり、『幸せな国＝社会福祉国家』なのです。社会福祉国家とは、“ゆりかごから墓場まで保障している国”のことです。“ゆりかごから墓場まで保障している国”とは、

どういう国かというと、成熟した民主主義の国のことです。民主主義とは、その名の通り“民”が主体です。すべての“国民”がどのような生活を送るのか、それを選ぶのは“国民”です。

ゆえに、民主主義と主権在民は同義語に理解されています。また、あえて民主主義を因数分解すると、「民主主義（主権在民）」＝（自由＋平等＋連帯＋連帯＋共生）になります。

これらを簡潔にまとめると、次のようになります。

幸福な国の方程式

幸せな国＝住みよい国＝生活大国＝ゆりかごから墓場まで保障している国＝民主主義の国（＝主権在民）＝自由＋平等＋連帯＋共生

著者はこの方程式をわが国、国民にあてはめて具体的に指摘している。

評者も、残念ながら以下の指摘に反論や否定することができない。歴史や文化、伝統、生活習慣等の違いという一言で、反論、否定を企てても、余り生産的な議論として展開することができない。

このことを日本人がしっかり理解しているかというと、ほとんどの人が理解していない。また、日本の国家を牽引している二大政党、民主党と自由民主党は、どちらも“民主”という言葉を使っていますが、本当に民主なのかと疑問を抱きます。

日本の学生に「民主主義とは？」と質問すると、「自分たちで自分たちのことを決めること」とすらっと答えられます。しかし、「自由とは何か」と聞くと、「自分で何をやってもいい」、「束縛されない」となるのです。「平等とは何か」という質問には、「まったく同じ権利」、「同じわけ前」になるのです。ましてや共生や連帯となると、「どういう意味？どうしたらいいのだろう？」と意味を理解できていない。だから行動が伴わないのです。

これは自由でも共生、連帯でもありません。要するに民主主義を理解していないのです。国民の“教育の義務”として、この民主主義をすべての国民に体得させていないのである。とりわけ保育園や幼稚園（０～６歳）までの自由な遊び中心の教育によって豊かな感性を育むような教育が家庭や社会においてな

されていない。むしろこれとは真反対の教育が過剰なくらい熱心に取り組まれているのが、わが国の実態です。国民一人ひとりが自ら国づくり主役にならない限り、社会福祉国家の構築を目指すような真の民主政治を志す政治家や政党が生まれてくることなどは、幻想意外のなにものでもない。千葉氏が異国の地で 40 年余りの間持ち続けている志とこの間の彼の志やさまざまな活動の集大成的な役割を持つ本書から私たちが学ぶべきは、本書で紹介されている世界一幸せな国デンマークのモデルそのものではない。国民が自らそれをつくったということである。

独特な労働市場システムは労働者、企業、政府の 3 者が話し合ってつくった。再生可能なエネルギーの導入には電力インフラの地域分散が必要だが、これも地域住民主導で行われた。自分たちが納得してつくったモデルだから、誇りをもち、維持するために協力する。有権者の 80 %以上が選挙で投票し、高い税金もいとわないのはそのためだ。

このメカニズムが実際にうまく機能していることは、生活レベルや経済競争力の高さに表れている。複数の幸福度の調査でデンマークがしばしば第 1 位になるのは、自分たちでつくったシステムがうまく機能しているという自信と、その下で安心して毎日を暮らせるという実感があるからである。

欧米モデルそのものをそっくりまねることはもはや適切でなく、中国、インドなどの新興国もモデルを提供してくれるわけではない。60 年振りに本格的に政権が代わった節目の今こそ、日本のこれからの姿は国民自らつくるという能動性を持つ絶好の機会と捉えて欲しい。

この本は社会福祉の専門書ではなく、国民一人ひとりが「私は幸せです！」と答えてくれるような国づくりのための啓発的な一般図書である。とりわけ本書は、世界的に有名なハンス・クリスチャン・アンデルセンの童話のなかからわが国の子どもたちにもよく知られた作品を導入して、世界で最も幸福な生活ができるデンマークがつくられた理由と取り組みについて平易に述べているので、子どもから高齢者まですべての人に親近感を持って読んでいただきたいと思う。特に子育て中の父親・母親、政治家、教育者、若者、行政関係者、社会福祉関係者には、是非とも一読して欲しい一冊である。

＜付記＞

著者から2010年1月1日、デンマークのコペンハーゲンのスタンプの押してある封書が評者宛に届いた。その中に、A-4サイズ1枚のペーパーに新年のメッセージが書かれていた。

本書に書かれている内容のポイントが要約して述べられていたので重複するところは割愛し、著者が本書を出版した以降の読者や講演等の場の聴衆者の生の声を聴いた上での意見を述べている箇所を中心に、評者が抜粋して紹介する。著者が本書で最も大切だと思っていること、読者に訴えたいことを再確認することができる。

「・・・・・・・・・（略）最近日本国内を旅して各地で沢山の方々に接しておりますと、人びとどうしたら住み良い国を作れるかについて理解しはじめている手ごたえを確かに感じるようになりましたが、一方、未だに日本とデンマークは歴史や文化が違うと決め付けて世界一幸せな国のあり方、それを支えている国民の考え方を学ぼうとしない人びとが多いのは残念なことです。

何故デンマーク人に出来て日本人に出来ないのか、それは歴史や文化の違いとは別の視点で考えるべき問題だと思います。何故なら、日本人は文明分野では西洋に追いつけ追いこせを100年足らずで実現した実績がそれを証明している。

デンマーク人に有って日本人に出来ないものを突き止めていくと、それは100何十年前かに新しい日本語になった「民主主義」の不在ということに気が付きます。日本は誰もが民主主義の国と思っているようですが、その現実は民衆が闘って勝ち取ったものではなく、第2次世界大戦後戦勝国から押し付けられた民主主義なのです。それ故、主権在民の意義すら理解しない日本国民があまりにも多いことは遺憾に堪えがたいものがあります。・・・・・・・・・・・・・（略）日本と同様、地下資源に乏しいデンマークは国の資源は子ども達であるとし、国をささえる国民教育に力を入れています。その教育のあり方は，無意味な学歴社会のための進学を強いることなく個々人を尊重した上で共生、連帯の社会を作るための学校教育の場で民主主義を文字で教えるのではなく実践し

て身につけさせているのです。

私たち日本人が日本に生まれて幸せだなあと思う国にするには日本国にとって必要な国民教育をすることが課題であると思います。私は今後、何が日本国民にとって必要な教育か、そのあり方を探求し続けて行きたいと願っています。

2010年正月　　バンクミケルセン記念財団　千葉　忠夫」

参　考　文　献

- 澤渡夏代ブラント（2009）『デンマークの高齢者が世界一幸せなわけ』大月書店
- 野村武夫（2004）『ノーマライゼーションが生まれた国・デンマーク』ミネルヴァ書房
- ケンジ・ステファン・ススキ（2006）『増補版　デンマークという国 自然エネルギー先進国　［風のがっこうからのレポート］』合同出版
- 大橋照枝（2005）『「満足社会」をデザインする第3のモノサシ　「持続可能な日本」へのシナリオ』ダイヤモンド社
- 高橋秀実（2009）『からくり民主主義』（新潮文庫）新潮社

西南学院大学人間科学部社会福祉学科